

# 四駆の匠

## 海外ラリー マイスター

# 中島聡尚

Toshihisa Nakajima

「野沢の耐久」を主催するNASCの代表、中島氏は、現役のサラリーマン。だがこれを言い訳にせず、有給を工面して借金をしてでも、海外ラリーに出場したいという自分の夢を叶えた。本気で願い、本気で行動すれば夢は叶う。そんな氏の半生を追った。



1990年にESSOサウスアメリカカンパニオン・レイトにエントリーしたときの写真。もうこの頃は、海外ラリーにも慣れてきていた。逆に言えば、ズボラ海外ラリーにハマっていた時期だ。



NASCの2007年のスケジュールが決まった。詳しくは左記のホームページで確認して欲しい。多くのレースに出て、主催をしているので多くの友人もできたらいい。中には芸能人も多いそうだ。

# 頑張ることを惜しまなければ サラリーマンだって絶対できる

テレビでバリダカを見たとき  
絶対に走ってやると決意した

私たちは何かに興味を持ったとき、何となく忙しいから、仕事があるからと言いつつ実行しなかったり諦めることがよくある。レースだって、楽しそうとは思っていても、お金がないから、時間がないから、と参加しようと思えない人がほとんどではないだろうか。だが、それ程環境に恵まれた人がどれくらいいるのだろうか。

このページの主人公、中島さんもそう思っていた。だが、中島さんは、限られた時間とお金を何と

か工面して海外ラリーに挑戦し、夢を叶えた経歴を持っている。

国内のオフロードレースではチャンピオンになった経験もある氏はある日、テレビでバリダカが放映されているのを見た。砂漠をハイスピードで走るというのは、どんな世界なんだろう、海外での自分のレベルはどうなんだろう、と興味を持ったという。そこで10年かけて出場することをいきなり決意するのだ。

ちなみに氏はサラリーマン。お金と時間が制限されていることは百も承知だ。だが、国内では、初任給8万円の頃から、エントリー

パラオラリーの参加費用は、  
月3万5000円の分割払い

フィー4万円ほどのレースに月2回出ていた。弟と一緒にやっていたこともあり、それができたのだが、そうして工夫すれば何とかかな。そう思った。

しかしいきなりのバリダカはさすがに厳しそう。そこで、現バリダカに最多出場の「チーム菅原」の菅原さんに相談。まずパラオラリーから経験することにした。これが1989年のことだ。

位を獲得した。しかし、海外ラリーにエントリーするにはお金がかかる。このエントリーに氏は、800万円の借金をした。返済は月3万5000円のローン払い。これを4〜5年かけて完済したという。

海外ラリーの要素を採用した  
国内ラリーを主催・開催する

この感覚を、もっと多くの人に味わってもらいたい。ひとしきりの夢を叶えた氏が、次に考えたのがそのことだった。

海外ラリーは、日本から見れば敷居が高いように思う。これでは次の選手が育たない。敷居を少しずつ低くしていくことはできないだろうか。そう考えた氏は、自ら

でゴールするテラノを見て、この頃からテラノに興味を持っていた。

バリダカでは、砂漠の様、満点の星空、その中で1日1日を燃え尽きるように走る。これを克服する楽しさは例えようがない。レースに関する苦しいことすべてが楽しいことにすり代わっていく、何とも言えない感動があったという。



念願のバリダカにエントリーしたのは1995年。バリ〜グラナダ〜ダカールのT2クラスを、左ハンドルのテラノで走った。念願の舞台は氏にどう映ったのか……。



がその道を築くことを決意。今度はこれを目標に張り切るようになる。現在、氏はNASC十サントワークスプロジェクトという組織を立ち上げ、年間5つのレースを主催している。その中のひとつが、今号92ページからの企画内で紹介しているオールジャパンダートエントランスシリーズの耐久レースだ。このレースはシリーズで年間5戦開催している。他にラリーレイド1戦、クラシックカーレース1戦、スーパーヒルクライム3戦も行なっている。

## 次は、もっと多くの人に 海外の砂漠を走って欲しい

つ。本戦では180km/hに及ぶこともあるが、スピードは日本人が一番苦手とする分野でもある。また、ヒルクは砂漠を越えるときに役立つ。砂漠の丘を越えるときはアクセルを踏みすぎても、ハマるだけのこともある。ここでのアクセルワークが砂漠と似ているのだ。そしてラリーレイド。これはカップという方位を示す表示を見ながら、行き先を考えて走るというラリー特有の知識を得られる。こういったことを盛り込みながら、基盤を作っているのだ。

とにかく、海外ラリーは色んなことに我慢しなければならぬ。その訓練の場にしてもらえれば、と氏は考えている。

「これまでやってきたことが、だんだん理想に近づいてきました。いや、まだまだ完成には全く至っていませんが、今後もっと理想に近づけるようレースに本腰を入れるようにしたんです」

これまで氏はサラリーマンをしながら、海外ラリーに出場したり、レースを主催したりと、日々を忙しく過ごしてきた。しかしこの冬でサラリー



1992年にエントリーしたバリ・モスクワ・北京ラリーでは、三菱時代の篠塚選手もエントリーしていた。ワークスのピットや仕事も感動モノだ。

マンを引退し、レース活動一本で行くことを決意したという。逆に言うと、これまではサラリーマンをしながらレースの主催も行なっていたのだ。

「クルマで家に帰る途中、我慢できなくて道で寝ちゃったこともあるんだ」。

笑いながらこう話すが、注がれるパワーはものすごいこと。なぜそこまでやるのかを訊ねると、「サラリーマンだってやればできる」。それをアピールしたかったのだ。

### 海外ラリーに出場するなら あの砂丘を体験して欲しい

きました。この恩返しのもりで次の選手を育てたいと思っています。私のレベルで海外に行けるんですから、もっと多くの人が出てほしいと思うんです。僕は、アジアXCラリーは国内の延長だと思っただけです。スケールの大きさは違っけれど、田んぼの脇道だったり、クロカンドだったり。これは国内にもありますからね。どうせ海外に行くなら、あの砂漠を体験して欲しいと思います。あと、せっかくならワークスのすごさも間近で体感して欲しい」

海外ラリーにエントリーすると、自分という存在がどういう人間なのか分かってくるという。ピンチに陥ったときの愚かさ。良さ。そういったことを見つけられるのも海外ラリーの楽しさという。

今後はレースをもっと確立して、もっと多くの人が海外へ行ける道しるべを作りたいという。